《書評》

天変地異を受け入れるアジアの人々の共通性を考える：『天変地異はどう語られてきたか：中国・日本・朝鮮・東南アジア』

串田久治*編著、東方書店、2020 年

宮　内　　肇†

我々は震災や疫禍を科学的に理解しようとする反面、そこからの復興や回復の社会的な原動力となるのは人々の庶幾や希望に訴える傾向が強い。では、人類はなぜ希望を持つ／持てるのであろうか。この自明的な問いを考えるためには、人類が災害といかに向き合い、どのようにとらえてきたのかについての知見の蓄積が要用であろう。

本書は、歴史学・宗教学・地域研究を専門とする 9 名が、中国・日本・朝鮮・東南アジアにおける「天変地異」にまつわる言説や逸話の考察を通じて、アジアに生きる人々の自然災害に対する認識を描き出した共同研究の成果である。以下、本書の概要とその意義について、評者の関心にひきつけて述べたい。

本書第一部「宗教と天変地異」では、中国の儒教・仏教およびインドネシアのイスラームにおいて、天変地異、とりわけ水害や地震あるいは津波が、いかに語られるのかをとりあげる。まず、串田久治氏「失政が天変地異を招く――儒教」は、古代中国における自然災害は人間社会の現象に起因して発生し、それは為政者の失政に対する天の譴責であったことを説く。これは前漢の武帝期に儒教の国教化を実現した董仲舒が、皇帝権力の抑制をはかる理論・「災異説」として用意したものであるが、その基底には人と自然との協調があった。ただ災異説は、漢代を通じて外戚や宦官の策動・暗躍を壟断する手段として用いられていく。他方、天譴を否定し「運命」を重視する王充の『論衡』をあげ、著者は両者の思想的立場を、災害に対する「頭」脳での理解と「心」の許容との差異として表現する。

ならば、後漢期に中国へ伝播した仏教は、災害をどのように語ったのだろうか。邢東風氏「『大地震動』は吉祥――仏教」は、諸仏典にて地震がいかに記述されたのかを論じる。仏教における地震は、仏教世界の特徴的な構造にもとづく「風」の作用であること、また、仏や菩薩、高僧の法力・神通力・感応力による大地を振動させる行為として解釈される。興味深いことは、こうした行為が

* 桃山学院大学文学部教授

† 立命館大学文学部准教授
miya1123@fc.ritsumei.ac.jp

© 立命館大学アジア・日本研究所
『立命館アジア・日本研究学術年報』2022, PRINT ISSN 2435-421X ONLINE ISSN 2435-4228, Vol.3, pp.195-198.

衆生を喜ばせ解脱させたり、身体の不自由な人をその苦境から解放し無常の道理を理解させたり、あるいは菩薩の成仏や国王即位の祝賀が大地の震動となるなど、「吉祥」としてとらえられていることであろう。一方、仏が悪魔に威嚇と処罰を与える行為として解釈され、そうした地震が人々を恐怖に陥れる「厄災」としてとらえられる場合もあるという。ただし、「吉祥」であれ「厄災」であれ、その本義は、地震後に現れる平安や新しい世界へ人々を導く願望に求められ、この点において、著者は儒教と異なる仏教世界での地震の特徴的なあり方を強調する。

では、仏教とは異なり一神教であるイスラームは、天変地異をいかに語るのであろうか。青山亨氏「地震は神の徴か？――イスラームの信仰と災害」は、2004年12月のスマトラ島沖地震とその直後に発生した津波を事例に、同島北端に位置するアチェのムスリム住民の証言から考察する。『クルアーン』では、地震は背信者に対する最後の審判での神罰と理解されるが、本論では、津波の際にこの神罰を直感したムスリムの証言や、震災はイスラームの教えに違背した神の譴責であるとのマレーシアのウラマーによる扇動的な説教が当地社会に好意的に受け入れられたことをあげる。そして、彼らの震災と信仰との関わりについて、神からの苦難を受容する力と、その力が将来の課題に立ち向かう力とを社会に与え、同時に他者を扶助する倫理的な義務感を生み出す肯定的な意義を提示する。

第二部「王権と天変地異」では、国家・政権と天変地異との関わりについて、日本・朝鮮半島・ジャワ島の事例が論じられる。まず、細井浩志氏「『日本』の誕生と疫病の発生」では、7世紀後半のヤマト政権が「日本国」を形成し始めた時期に人の移動が増大した結果、外国は疫病をもたらす場所との認識が生まれたと論じ、政治や社会に対する批判としての災異説とは異なり、古代の日本では、個人として疫病を治癒すべく自己の善行を反省し、僧侶・陰陽師に対処を求めるようになったとする。

これに対して、古来より中国儒教の影響を受けた朝鮮半島では、天変地異は為政者が政治的な正当性を示すべく、儒教経典にもとづく修徳だけでなく仏教・道教・シャーマニズムの儀式が行われたが、16世紀から17世紀にかけての相次ぐ内憂外患のなかで、民衆社会に流布した讖緯書をとりあげた佐々充昭氏「朝鮮における天変地異と予言――讖緯書『鄭鑑録』に描かれたユートピア」は刺激的な論考である。朝鮮王朝が自然災害により滅亡し新王朝が成立する終末論を予言するとともに、「希望の未来」としてのユートピアの在処や中立的かつ自由に生きる保身術を唱えた同書の思想は、18世紀には半島全域に浸透し、19世紀半ばの東学や新宗教の誕生をもたらし、さらには現代の韓国社会へと継承される。基層社会では天譴による為政の改善よりも、天変地異を契機として、仏教（弥勒信仰）や土着の巫俗信仰（シャーマニズム）などの民間における救済思想が革命思想を生み出したことが、朝鮮半島における特質であったが、こうした多様な信仰の融合と災害との関わりについては、次篇において、2006年5月のジャワ島中部地震および直前のムラピ山の火砕流に対し、民衆が王宮の秘儀を求めた事例を取り上げた深見純生氏「沸騰する南海北山――スルタンの出番か」からも看取できる。

被災地域のジョグジャカルタ特別州は、15世紀以降のイスラーム化と爾後の歴史展開により、現在でも州知事はスルタンによる世襲が認められているが、大乗仏教やヒンドゥー教などのインド文化を王の神格化に受容してきた経緯がイスラーム化とも関わるなど特異な信仰世界が息づいている。同論ではその一例として、国王の守護精霊である「南海の女王」への信仰をとりあげ、ジャワにおいて、為政者はこうした精霊との良好な関係を重視してきたことを論じる。そして、その象徴

としての王家の家宝である神旗の巡回が近代以降の疫病蔓延を鎮静したという記憶から、2006年の災害の際にも民衆から神旗巡回を求める声が上がったことが紹介される。本論の特徴は、為政者と民衆とが現代社会において、同一の信仰世界を共有することにあろうが、興味深いのは、神旗巡回に対して、王宮が伝統的価値観と近代的な社会教育との苦境に遭遇したことであろう。

こうした天変地異とその地に生きる為政者・民衆との関わりに対し、第三部「外来者と天変地異」では、外来者の流入が当地の災害観にいかなる影響をもたらしたのかを考察する。まず、一色哲氏「《琉球－沖縄》における海上からの『来訪者』と天変地異の『記憶』――ウルマ島とニライカナイをめぐって」では、豊穣や幸福をもたらす神が異界から来る信仰をいかに解釈すべきかを主題として、自然災害が多発する沖縄では、記憶（伝説・奇伝）の継承や経験にもとづき居住地を選定してきた経緯が紹介される一方、沖縄史における薩摩藩・明治政府・「帝国」日本軍の駐屯・米軍占領がもたらした人々への苦境もまた予測困難な地異ととらえる。こうした「禍」をもたらす外来者との関係をいかに築いてきたのかについて、自衛隊の配備が進む与那国島において、同島への外敵退散を祈祷する祭祀に自衛隊幹部を招く事例より、同地域の人々の「禍」を「福」となすしなやかな精神や知恵を読み解く。

次篇の青野正明氏「植民地支配は天変地異に代わるものだったのか――近代朝鮮での王朝交替予言の変容」では、佐々論文がとりあげた『鄭鑑録』の終末思想が、三一運動を契機に大小の新宗教団体を生み、また、民族主義的なナショナリズムへと展開するが、「帝国」日本の植民地支配は新たな天変地異として認識され、そのなかで日本がいかに取り締まろうとしたのかを論じる。前篇の沖縄の事例とは異なり、朝鮮の人々にとっての終末思想は、日本の支配から解放までの長期間の「禍」でしかなかったと言えよう。

さて、中国の長期にわたる王朝体制のなかで、災異説はいかなる変容を見せたのか。本書の最終篇、辻高広氏「天変地異は天子の責任か？――康熙帝の地震観とヨーロッパの科学知識」では、キリスト教宣教師がもたらした科学技術の知識が、皇帝の天譴観にいかなる影響をあたえたのかについて、清朝第4代皇帝・康熙帝の修省詔を通じて考察する。康熙帝は3度の修省詔を発布するが、これは天譴を自認する行為を通じて、政治の刷新・集権、あるいは官員の懐柔といった明確な目的があり、その背景には時々の王朝支配の状況に依拠し、また、君主としての自信や不安を看取できることが論じられる。ここからは康熙帝が天災を自然現象として認識したことがうかがえるが、こうした意識の背景には、ヨーロッパより来華した宣教師がもたらした科学知識に対する康熙帝の造詣があった。この知識とはスコラ哲学の「地震気動説」であったが、康熙帝はさらに朱子学の「理気二元論」をも意識した独自の構造的な地震発生の見解を持ち、天譴に対する論理的な解決法を示そうとしていた。西洋知識という外来者が伝統的な災異説への意識を変革したと言い得よう。

本書では、以上9編の論考とともに、本書の意義を考える「座談会・天変地異はどう語られてきたか？――天変地異の両義性」が収録され、天変地異に向き合う際の「禍」と「福」との両義性と、俯瞰的にとらえる国際化の重要性が議論される。いずれの視点も本書の現代的な意義において重要であることは評者も首肯するが、ここでは「座談会」の議論をふまえつつ、とりわけ、天変地異の両義性から、評者の関心にひきつけて本書の意義を述べたい。

ひとつは、基層社会に生きる人々にとっての多様な信仰が天変地異という災害を克服する希望となることであろう。それは天変地異がだれにとって「禍」なのかという問いに帰結すると思われる。

「座談会」にて辻氏も指摘しているが、前漢の儒教国教化のなかで形成された災異説において、天譴は政治や社会を改善する契機となりうるが、災害を天譴とするか否か、あるいはその原因を誰／何に求めるのかは、その実、為政者の判断に委ねられた。串田論文における外戚・宦官の排除や、辻論文における天譴の責任を高官に強いたことからも、その恣意性はうかがえよう。結局のところ、災異説は統治者としての儒教的世界観で完結していた。

こうした為政者の世界観に対して、佐々・青野両氏の『鄭鑑録』をめぐる議論は、為政者にとっての災異説が民衆社会では共有されることなく、儒教よりも道教・仏教・巫俗などの民間信仰の世界観のなかで、希望の未来への期待として天変地異がとらえられ、近代以降の民族的ナショナリズムの骨格を担ったことは、災害をめぐる為政者と市井との世界観の相違を明瞭に描出した点において本書の特筆すべき主点と言えよう。

朝鮮半島で見られた両者の世界観の相違は、本書では取り上げられなかったが、伝統中国においても同様であろう。基層社会への統治権力を儒教理念によって補完しようとした、とりわけ明清期の王朝体制は、宗族結合に象徴される儒教理念にもとづく家族意識を形成したが、これは王朝の保護を意味しない。また、18 世紀以降の急速な人口増加にともなう耕地不足と新たな耕地の開拓がもたらす自然災害を背景に、身寄りのない人々やアウトローは、浄土思想やマニ教が混淆した白蓮教やキリスト教の影響を受けた拝上帝会などに代表される秘密結社へと吸収されるが、こうした信仰には、『鄭鑑録』と同様に終末思想にもとづく救世主の出現が語られた。他方、宗族結合においても、費孝通が論じるように、その家族意識は、儒教への理解というよりも、それ自体を自明なものとしてとらえていたと理解すべきであり、基層社会においては道教や民間信仰こそが日常生活の精神的支柱となっていたととらえる研究も少なくない。また、深見論文が論じたジョグジャカルタの住民が求めた神旗巡回も、スルタンへの帰依というよりも、仏教やヒンドゥー教の影響を内包した同地の特異な信仰世界にもとづくものであり、朝鮮半島や中国大陸の基層社会との共通性を読みとることも可能である。

もうひとつの意義は、天変地異は人々になにをもたらすのかという問いである。青山論文では、背信者への神の怒りはアチェ住民にとって汚職や殺人、不道徳な生活といった人間の汚れを受入れ、それを改善しようとする課題への意識とそのための他者を扶助する倫理観・義務感の醸成への帰結が特筆され、また、一色論文にて論じられた移住不可能な「島」に生きる沖縄の人々が、災難をもたらす外来者と共生してきた経験からは、天変地異が人々に与える「禍」や苦難をいかに克服できるのかを考えさせる。邢論文がとりあげた仏教における「吉祥」としての地震観は、まさに「禍」を希望に転換しようとした人々の営為としてとらえることもできよう。災害を克服する力となるのは、特定・固有の“宗教”だけに求められるのではなく、多様な文化と“信仰”から生まれるのであり、また、こうした信仰が忘却されることなく、希望を与える存在として天変地異は必要とされてきたのではないだろうか。

以上、評者の関心にひきつけて本書の意義を述べた。本書にはさらに多くの特徴・意義があることは重々承知しているが、評者はその実力を備え持たない。今後、本書がさらに多くの人々に読み継がれ、多くの意義が見出されることを心より願う。